

未来に向け地域と共に歩む

J A にしたま

中村勝司組合長に聞く

6 月に開催された西多摩農業協同組合総代会後の理事会で代表理事組合長になった中村勝司さんに決意を聞いた。

新組合長として抱負 全国一律の課題になる。また、J A にしたまでも人材確保に苦慮している。働き方改革に取り組みたい。

中村 J A は地域と共にある。未来に向けて地域と共に歩みたい。組合員の皆さんあっての J A なので大いに利用してもらうことが基本になる。農業者の底上げを図りたい。

J A にしたまの課題は。

中村 農業者の高齢化、事業承継の問題は

も地域住民の皆さんと直売所や J A 店舗での日々のかわり合いを深め、身近な存在でなければならぬと感じている。

持続可能な東京農業の確立に向け、J A にしたまとしての取り組みは。

中村 継続して農業を営むために、農家に

中村 J A は農産物の生産・販売以外にも金融や共済業務のサービス、食品や日用品の

中村 J A は、農産物の生産・販売以外にも金

農業者の底上げを図りたい

直売所の有効性は。中村 直売所は採れたての農産物を地域住民の食卓に新鮮なうちに届けることができる。また、小規模の農家でも気軽に販売できる出荷先となっている。こうした販売方法により地産地消を実践し、



society&business Tokyo25 journal
執筆協力 編集室システムU okamura.nobuyoshi@gmail.com



それは国内農業への理解を深めることにも繋がっている。併せて、輸送の距離やコストを抑えることにも繋がるのでフードマイレージを圧縮し、省エネの実践にもなっている。

中村 地産地消の大切さを広め、管内農業の活性化を図りたい。組合員をはじめ地域にとつてなくてはならない J A にしたまでありたい。

3 農業者がやりがい、苦労語る

羽村でトークイベント「Youtology」



3 人の農業者が現状を語り、市民とのつながりを深めた

農地を失くさないために

地域に深く関わるゲストから地元に関する話を聞くトークイベント「Youtology」(ユートロジー)が9月21日、プリモホ

緑ヶ丘で開催された。3 人の農業者が就農のきっかけ、羽村で農業

中村 米農家の清水亮一さんは金融機関に勤めていたが、40 歳で退職。

「父親から託された田畑を守り農業を継いだ。一緒に農業ができ

た時間はわずかだったため、農作業は近所の先輩に教わった」という。「父親が仲間と冬の裏作として球根を育てたチューリップも引き継いだ」。色とりどりの花は「はむら花と水のまつり」の主役となっている。

障害者福祉施設の運営を手掛けており、「時間を作るために比較的繁忙期に集中して作業ができる米や花などを作っている」とし、「家族の協力がなければ農業はできない。その家族が楽しく過ごしていれば、仕事が楽しくなる」とやりがいを語った。

中村さんは「13 棟のハウスで花卉を栽培し、直売所や市場に出荷している。水やりと出荷、土づくり、施肥などの作業で太陽が昇る時間から夕方までお手伝いの人を含め忙しい日は最大 10 人ほどが働いている」と日課を語り、「妻が経理を担当し、毎日一緒だが、妻がネイリスト、私が設計の仕事で個人事業主として行なうなど、自由で楽しむ時間をうまく確保している」とし



熱心に耳を傾ける参加者ら

コミュニケーションをしっかりと取り、休みも比較的自由に取れている」とした。

話題は清水さんが取り組む「酒はむら」に。清水さんは「羽村市にある農地は計 38 畧。近い将来、消滅してしまうと思った。農地を失くさないために特産品をつくらうと、羽村産のコシヒカリと羽村の地下水による日本酒づくりを始め 5 年目になる。今後は米焼酎の蒸溜所を羽村市に建てたいと活動している」と報告した。

「住んでいてもまだまだ知らない、羽村市の『ヒト』、羽村市で作っている『モノ』、羽村市の過去や今起きている『コト』について知ることができる集まりが欲しい」という市民の声から生まれた同イベント。

参加者からは「市民の立場でどのように農業を応援していったらいいか」との声が多く聞かれた。登壇者からは「市民の皆さんには野菜、花、米を直売所で購入し、応援してほしい」との答えが返った。